様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０３３６

研究課題名（和文）複合文化学の方法の構築

研究課題名（英文）A approach to establishing the method for interdisciplinary cultural sciences

研究代表者
福田　育弘（Fukuda, Ikuhiro）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：７０２３８４７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円、（間接経費）　　750,000円

研究成果の概要（和文）：　全体として複合文化学の方法論の基礎が確立された。
福田は、当初の予定通り、フランス、パリ・ソルボンヌ大学地理学科の教授・研究者との連携によって、日仏におけるワインの文化的受容の研究を深め、2013年12月13日14日の日仏シンポジウム「ワインをめぐる人を風景」を開催した。これによってワインの受容が文化的社会的背景をもつことが明らかになった。神尾は、行為としてのコミュニケーションに基礎をおくルーマンの社会理論を、日本のネット社会に応用し、日本の若者に顕著な「つながりたい」欲望の在り方を分析した。
この２人の具体的で日常的な文化現象の考察により、複合文化学の在り方やその方法論が明確になった。

研究成果の概要（英文）：On the whole of our research during the year, the basis of the method of the interdisciplinary cultural sciences has been defined well.
Fukuda deepened the survey of the wine acceptance in Japan and in France in collaboration of the professor-researchers of the geography of the food to the university Paris-Sorbonne and organized with them the symposium "Men, landscapes and practices of wine at the Maison Franco-Japanaise in Tokyo December 13-14 2013. Kamio adapted the theory of the social systems of sociologist Niklas Luhmann well to analyse the society of Japanese internet and put in evidence the modes of the desire of the young Japanese to bind with others.
By these studies of the cultural phenomena in the daily life, we made clearer what is the interdisciplinary cultural sciences and its method.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：複合　文化　つながり　飲食　集合的欲望　社会的表象　感性　変容

１．研究開始当初の背景

（１）本研究はマックス・ヴェーバーの規定を踏襲し、「文化」を「世界に起こる、意味のない、無限の出来事のうち、人間の立場から意味と意義とを与えられた有限の一片」として理解した上で、日本型の文化研究のあり方として「複合文化学」の方法を構築することを目的としている。日本における文化研究は従来、地域文化研究、比較文化研究、文化史研究、多文化研究、異文化研究、カルチュラル・スタディーズなどの形をとってきた。そこではおおむね、考察対象の文化の《地域》性が前提されていた。「複合文化学」は《地域》ではなく《テーマ》を出発点にする。

「複合文化学」は一つの《テーマ》をめぐってなされる従来の「学際的な研究」とも異なる。「学際的な研究」のもっとも大きな問題は、伝統的な専門分野にかかわる複数の研究者がそれぞれの観点から一つの《テーマ》にアプローチした結果をいわば加算し、それを束ねて当該の《テーマ》の「諸相」として提示することで満足していた点にある。それは「学際的な研究」に方法論的な基礎づけが欠けていたためである。

（２）われわれはすでに 2008 年度早稲田大学教育総合研究所一般研究部会補助金を受け、「学際的な分野のための《複合的》ゼミ運営法」を研究した。報告書では、二人が模索している「複合文化学」の基礎づけを、学生が立てた学際的な《テーマ》の解決のために応用し、その結果をその都度、「複合文化学」の基礎づけの作業へとフィードバックするプロセスを報告した。学生たちが関心をいだく文化現象が一つの言語圏や《地域》にしばられていなかったことは、「複合文化学」をできるだけ早急に基礎づけ、その様々な手法を暗黙知ではない明示的な方法論の形にすることが必要であることを、われわれに確信させた。

福田は飲食という領域のなかに具体的な《テーマ》を発見し、「複合文化学」的な試みを実践してきた。本研究では、その実践のプロセスを方法論的なレベルで一般化することが課題となる。とくに文化史研究と差異化したかたちで「複合文化学」を定義することが緊急の課題である。

神尾は平成 14-17 年度基盤研究（C）「ドイツ文学研究とカルチュラル・スタディーズ」において、英国で誕生したカルチュラル・スタディーズがドイツにおいて「文化学」に変じたプロセスを追い、最終的に、この「文化学」が日本における外国文学研究に応用できることを具体的に示すことができた。ただし、そこではあくまでも外国文学研究が対象領域であり、文学に限定されない文化現象に対する眼差しが欠けていた。本研究では、外国文学研究ではなく、広く文化現象を扱うことができるような「複合文化学」が構築されることになるはずである。

国外の研究動向としては、フランスにおける「文化地理学」とドイツにおける「文化学」および「メディア論」が、本研究と比較的強く関連している。ドイツの「文化学」は 1990 年のドイツ再統一をきっかけにしたドイツの大学改革に由来している。文化研究の領域で先行していたカルチュラル・スタディーズをも、援用できる多くの方法の一つとして概観することができる点では、「文化学」は「複合文化学」にとって有益であるが、それらの方法を体系化するところまでは及んでいない。「複合文化学」は複数の方法を関連づけ体系化することをめざしている。

フランスにおいては、1950 年代以降盛んになるアナールの歴史研究と、近年地理学で重要な部門となりつつある文化地理学があげられる。前者はパリの社会科学高等研究院（École des hautes études en sciences sociales 略称 EHESS）で学際的研究としてすでに確固とした成果があがっており、後者は現在パリのソルボンヌ大学の地理学科で学際的研究として展開されつつあり、すでに 1950 年代から重要な研究成果のあがっていた飲食の歴史地理学的研究の成果をふまえ、2010 年には２年制のマスターコースに飲食部門が正規に創設された。

２．研究の目的

（１）本研究は、「複合文化学」の方法を構築し、その様々な手法を暗黙知ではない明示的な方法論の形にすることを目的としている。具体的には、文化現象への三つのアプローチを、①文化を構成する要素の複数性、②文化を記録するメディアの多面性、③文化現象が生起する場の多元性に分けて分析し、しかる後に文化現象の記述のフォーマットを、①特定の文化現象の複数の視座からの考察と②複数の文化現象の構造的類同性の考察の二つの側面から確定する。このことによって、日本から海外に発信できる文化研究の方法を確立し、学際的な文化研究をこころざす学生や若手研究者を教育の場面で支援することもできるはずである。

（２）学際的研究のための単なる共通プラットフォームとしてではなく、新しい一つの方法として「複合文化学」を確立するために、「複合文化学」の方法を体系化する。私たちの研究は現時点で、「複合文化学」の方法の体系を以下のようにスケッチすることができるところまで到達している。研究期間内には、①この構図の有効性をいくつかの個別研究で確認し、②それが確認できたところで体系を抽象的なレベルでさらに精緻化したのち、③他の分野から参入する研究者や学生が利用できるように汎用化する。

（３）上記２点の目的を達成するための、まず文化現象への三つの視点からアプローチする。

①文化を構成する要素の複数性：文化現象は一つの《地域》に限定されない。一つに見え

る文化も、他の文化現象との衝突や融合を経て、イマココで暫定的に一つの《地域》に結ばれているように見えるだけである。一つの文化が他のさまざまな文化との衝突・融合から生成する時の、複数の要素を明らかにする。
②文化を記録するメディアの多面性：文化現象を記録するメディアの領域を拡張する。文化現象がどのようなメディアを引き寄せるか、その親和性を考察したり、同一の文化現象が異なったメディアによって記録されるとき、どのような変異が生じるかを考える。
③文化現象が生起する場の多元性：社会、政治、経済、歴史、教育、科学、芸術など既存の学問分野のタテ割りによって、各学問分野のなかで個別の文化現象として扱われてきた文化現象に通底する構造を見る。
（４）これらの３つの視点からの文化現象の分析を行うに際して、われわれは「複合文化学」の２つのフォーマット、つまり文化現象の記述の二つのタイプを想定している。
①特定の文化現象の複数の視座からの考察：一つの文化現象を複数の視座（環境論・哲学、文化人類学、民俗学、文化地理学、精神医学・精神分析、記号論、歴史学、文化社会学）から分析する。たとえば、飲食と身体に関する表象の形成と変遷を、絵画、文学、映画、マンガなどを中心に、一般向けの医学書や飲食に関するマナー書や各種の雑誌などまでふくめて分析するといったとことが考えられるだろう。そして、これは主に福田のフォーマットである。
②複数の文化現象の構造的類同性の考察：ある時代に起こった、相互に影響関係を一義的に確定できない複数の文化現象の構造的な類同性を分析することで、その時代の集合的な無意識を記述する。たとえば、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて登場したあるいは流行した様々な文化現象（考古学、推理小説、細菌学、性科学、精神分析、象徴主義の絵画、蓄音機、無声映画、レントゲン写真）が暗黙のうちに前提にしていた知の枠組みを分析すると、知覚可能なノイズによる深層の確定や内なる他者の発見といった構造が共通していることが明らかになる。複数の異なった文化現象に《症候》として現出した時代の集合的な無意識を確認することができる。①が福田のフォーマットであるように、この②は共同研究者である神尾のフォーマットである。

３．研究の方法
　本研究は次の三つのステップで実行される。
（１）「複合文化学のケーススタディ」（平成 22-23 年度）：「特定の文化現象の複数の視座からの考察」と「複数の文化現象の構造的類同性の考察」のケーススタディを行う。
（２）「複合文化学の方法論の体系化」（平成 23-24 年度）：文献解読・講読会・研究会・情報収集のための海外出張を行う。
（３）「複合文化学」の体系化された方法論のマニュアル化（平成 25 年）：「複合文化学」の基礎理論をアウトプットする。

４．研究成果
（１）３年間全体を通して、当初「研究の目的」で予定されていた複合文化学の方法論が、その基礎において確立されたといえるだろう。
わたしたちが当初掲げた研究の目的は、「複合文化学」の方法を構築し、その様々な手法を暗黙知ではない明示的な方法論の形にすること」であり、「具体的に」「文化現象への三つのアプローチ」を想定していた。それらは「① 文化を構成する要素の複数性、② 文化を記録するメディアの多面性、③ 文化現象が生起する場の多元性」であり、さらに、それらの具体的な研究において確認した後、「文化現象の記述のフォーマット」について、「① 特定の文化現象の複数の視座からの考察」と「② 複数の文化現象の構造的類同性の考察」であった。この双方において以下に総括できるような研究成果が得られた。

（２）福田は文化現象の通時的側面に焦点をあて、「特定の文化現象の複数の視座からの考察」を、飲食と風景という領域において深めた。具体的にいえば、福田は、パリ・ソルボンヌ大学地理学科の研究者と緊密に連携し、飲食の分野の研究を主に受容という面から行った。この過程で、フランスの文化地理学のほか、アナール派歴史学、ブルデューの文化社会学、文化人類学が、こうした飲食をめぐる文化現象の解明と分析に有効であることがわかった。さらに、それらの学問の概念と方法論の導入により、飲食文化がつねに複数の要素とその変容によって構成されると同時に、飲食文化が書物や絵画、アニメやマンガなど複数のメディアによって記録され、さらに同じ飲食現象がフランスや日本など、複数の場所で、医療から文学表現にいたる多元的レベルで同時並行的に展開することも確認された。
（３）一方、共同研究者の神尾は、文化現象の共時的展開という面にフォーカスして、「複数の文化現象の構造的類同性」という視点から、社会におけるコミュニケーションの在り方を、その意味づけ、その表象や表現の側面から分析した。神尾が当初依拠したのは、精神分析における集合的欲望という概念であり、研究の過程で、それをさらにルーマンの社会システム論で補完し、複合文化学の方法論を深化させた。ルーマンによれば、社会は人と人とを結ぶ行為としてのコミュニケーション行為のオートポイエイシス的展開によって成立しているとされる。このような視点をもとに、文化現象に適用可能な方法論を探ることが神尾の研究の基本的方向であった。神尾の行った具体的な研究を通して、これらの分析視点が、日本における身体表象

および日本の若者のインターネットによる他者との「つながり」志向の分析に有効であり、またそのような具体的な分析を通して、研究の目的にもあげられている、文化の複数性・文化保持のメディアの多面性・文化現象発生の多元性も確認することができた。とくに、神尾の研究によって同じような現象が異なる分野で確認できた点は、グローバル化した現代において異なる文化現象が同種の集団的欲望によって貫徹されていることを明らかにした。こうして、神尾による研究は、全体として、文化学的方法としての集合的欲望と社会システム論の有効性が証明され、またそれらの概念的道具の洗練をもたらした。

（４）上記に示されたような福田と神尾による具体的で日常的な文化現象の考察により、複合文化学の在り方やその方法論が明確になったと結論づけられるだろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

① 福 田　育 弘 、Modernisation et popularisation：la transformation des pratiques et des sensibilités alimentaires après le désastre en 1923、*Géographie et cultures*、査読有、numéro spécial (dir.：Sylvie Guichard-Anguis et Nicolas Baumert)、L'Harmattan、2014、pp.7-17（フランス語論文、頁数は予定）。

② 福田 育弘、いただきます！ アンパンマン ── 日本的な飲食の感性を体現するヒーロー、ユリイカ、青土社、査読無、第 45 巻第 10 号、

③ 福田 育弘、外食の大衆化と飲食空間のジェンダー化 ― 関東大震災後の飲食場の再編成 ―、学術研究―人文科学・社会科学編―、査読無、早稲田大学教育・総合科学学術院、第 62 号、2014、pp.289-306

④ 神尾 達之、象徴界の廃墟へようこそ、学術研究―人文科学・社会科学編―、早稲田大学教育・総合科学学術院、査読無、第 62 号、2014、pp.253-269

⑤ 福田 育弘、西洋料理からフレンチへ―飲食場の空間論的転回―、学術研究―人文科学・社会科学編―、早稲田大学教育・総合科学学術院、査読無、第 61 号、2013、pp.339-370

⑥ 福田 育弘、食事に土地を感じるフランス式飲食、日仏経済交流会編、フランス人の流儀、大修館書店（単行本）、査読無、2012、pp.182-191

⑦ 福田 育弘、飲食がつくる風土、風土がつくる飲食―風景と意味の通い―、学術研究― 人文科学・社会科学編―、早稲田大学教育・総合科学学術院、査読無、第 60 号、2012、pp.327-352

⑧ 福田 育弘、飲食にみる文化変容 鮨から sushi へ、学術研究―複合文化学科編―、早稲田大学教育学部、査読無、第 59 号、2011、pp.29-58

⑨ 福田 育弘、Traduire DION en japonais, traduire le vin en saké Imaginaire traduit ou traduction de l'imaginaire ?、*Le bon vin entre terroir, savoir-faire et savoir-boire* (Dir. Jean-Robert Pitte)、Éditons CNRS (Centre National des Recherches Scientifiques)、査読有、2010、137-145（フランス語論文）

〔学会発表〕（計３件）

① 福田 育弘、La gastronomie japonaise et sa sensibilité ： adaptation et raffinement（日本の飲食文化とその感性：変容と洗練）、ナント市主催の日本フェスティヴァル、2014、フランス・ナント市市民ホール

② 福田 育弘、日本におけるワインの受容と変容 西洋文化とジェンダー化、日仏シンポジウム「ワインをめぐる人と風景　その変遷と可能性 日本とフランスから」、2014、東京恵比寿・日仏会館

③ 神尾 達之、BBS を使った集合知への寄与と個人への還元システム、：私立大学情報教育協会、平成 23 年度 ICT 利用による教育改善研究発表会、2011

６．研究組織

(1)研究代表者

福田 育弘（FUKUDA, Ikuhiro）
早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部 複合文化学科 教授
研究者番号：70238476

(2)研究分担者

神尾 達之（KAMIO, Tatsuyuki）
早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部 複合文化学科 教授
研究者番号： 60152849